

「帝王学に学ぶ」

世の中が混沌とし、次から次に情報が氾濫し、経営トップとして社長は、ひと時も心の休まる時がありません。

しかも、見えない先行きを予測し、正しい判断を下し続ける立場にあります。

関与させてもらう、500社の社長の、心のうちのご苦勞と煩悶に、何とか少しでも役に立ちたいと考え試行錯誤し、得たものの一つが『帝王学』の重要性です。

現在、毎月一回「先哲に学ぶ人間学」と題して、8カ所で勉強会を開催させていただいていますが、まだ何か一つ大切なものが欠落している。社長の不安や悩みの、本質をズバリと抉るには、まだ一歩弱いと思って参りました。

“人間学”は、人として何が正しいか、何を判断基準にすれば良いのかの学びです。会社経営ならば、「先義後利の経営」をしていくこと、「経営理念」を判断基準にしていくことで、ほぼ足ります。“人間学”は、いわば、リーダー全般の広く浅く身に付けるべき学問です。巷間言われる、リベラルアーツの少し上の学びです。

しかし、経営トップの社長には、この人間学だけでは、まだ足りないのです。

最終デシジョン・メーカーとして、他の誰にも相談できない孤独な重大な責任があるのです。判断を一つ誤れば、会社を潰し、社員を路頭に迷わすことになるかもしれないのです。

その社長が、どうしても身に付けなければならない学問こそ、この『帝王学』なのです。

「貞観政要」や「宋名臣言行録」あるいは、「君主論」は、必読書といわれます。今は亡き、伊藤肇氏は、その著「現代の帝王学」の中で、帝王学は『原理原則を教えてもらう師をもつこと』『直言してくれる側近をもつこと』『よき幕賓をもつこと』の三つの柱から成り立っていると、指摘しています。

トップリーダーたる社長には、帝王学を身に付けることが、決定的に重要です。身に付けるとは、胆力・胆識として、行動に、実践に、いつでも、どこでも活用できることです。一通り学んだ程度の、教養として、知識として知っていることでは実務には役に立ちません。否、却って重要な判断をする時の妨げになります。

繰り返し、繰り返し学び、自ら実践し、日頃から鍛練しておくことで、始めて使えるのです。日々のビヘイビアが、いざという時に、身体が正しく反応するのです。

特に、二代目・三代目で、立場上社長になった、あるいは創業者だが、心の芯がまだ明確でないとされる方には、必須の学びです。

社長、是非この『帝王学』を身に付け、正々堂々の経営をして参りましょう。

力はありませんが、私が、今まで師に付いて学んだ『帝王学』を精一杯解説させていただきます。人生の師を見つけ、側近を育て、多くの幕賓を集めて下さい。



今月のポイント

トップリーダー必須の学問